

## 2024 《吃音》指導講座〔参加感想〕

“熱い”と書きたくなるような日々が、延々と続いています。

この度の講座も、外の熱気に負けずとも劣らない、先生方の熱意が充満した講座だったと感じています。

以下に、講座への感想の中から、講座の趣旨をととても良く表現していただいたと感じる言葉をプロットしてみました。

- 講座の中で沢山のDVDを見せていただいたので、目と耳で感じる事ができたのがとてもよかったです。
- 自分の声”とは何かを考えさせられました。
- 最初に「吃音の症状」について動画を観ながら確認できてよかった。
- 自分が今取り組んでいる訓練もやりようによってはいくらでも吃症状を悪化させたり良くしたりする可能性があるかと改めて感じました。
- 自分の耳をもっと育てていかななくてはならないと思いました。
- その子の生き方にも指導がかかわっていることを強く感じました。

勿論、ここに挙げた言葉だけでは、ありません。それぞれの方の言葉にもたくさんの貴重な言葉があります。

ぜひ、噛み締めてお読みいただければと思います。

山形言語臨床教育研究会代表 梅村 正俊 2024.10.31

### 【お断り】

- ① 行替えは、本文と異なる場合があります。
- ② 文中での【●●】内の記述は、梅村の感想や意見です。  
個人の感想に対して、多少厳しいと感じられるコメントを述べさせていただいた箇所が数か所あります。これは、決して、個人へ向けたコメントではありません。本講座に参加された**全ての先生方に考えていただきたい内容**と受け止めて下さい。尚、梅村からのコメントの記述は、全て明朝体で記載してあります。
- ③ **ご本人の記述（書体=HG丸ゴシック）の中で、赤文字にした部分も、全ての先生方にも考えて頂きたいと思える内容です。**
- ④ 構音記号は、旧記号です。ご了承ください。
- ⑤ 個人名は、所属を含めて全て記入しておりません。ですが、おおよその職種があったほうが良いと考え、以下の4種に分類し、番号の後に記しました。

A：通級指導教室（ことばの教室） B：病院・福祉関係の言語聴覚士

C：歯科クリニック関係 D：その他



O1A

“自分の声”とは何かを考えさせられました。大半が構音の子で吃音の子はめったにいないため、吃音の指導が分からないまま、子どもに対応していました。ことばの教室では、1対1の指導のため、いつも、明るく、楽しく練習できるよう、テンションあげあげでテンポよく進めていました。

構音の指導と吃音の指導の違いに気付かないまま進めていました。今回参加したことで、ささいなことで、吃を誘発してしまうことや、その場、その時、その瞬間の子どもの様子、状態に即応した指導をしなければならないことを知りました。無理をさせたり、意味のないことをさせたりしていたのかもしれない。

決定権は子どもにあること、子ども自身が自分で納得できる、許せる範囲を見つけられるようにしていくことも大事にしていきたいと思います。

O2B

共調同時音読法について、ご指導をいただき大変勉強になりました。

“その時は吃らなくても、その指導だと後からまた吃る”

“その声はブロックを誘発してしまう”

たくさんのご助言をいただき、自分が何気なく発した声で子どものブロックを誘発してしまっていたのかもしれないと思うと恐ろしいです。

子どもの声—指導者の声 気をつけて明日からの臨床にはげみたいと思います。何よりも楽しく、「何しに行ってたかわからないけど楽しかったことだけ覚えてる」と言ってもらえるようにになりたいと思います。

O3A

最初に「吃音の症状」について動画を観ながら確認できてよかった。

(中核症状の中の特に難発についての理解が足りていなかったことに気付いた。この4月から、ことばの教室の担当になったばかりなので、どこにどのような緊張がはしているのか、正しく観察できるように努力したい)

自分が普通に出している声について、イントネーションや声の高さ…指摘を受けたところは心にとめて、関わる際、気を付けていこうと思った。良いと思われる声の時は、それを教えていただいたので、忘れないようにしたい。

今まで特別支援教育の教師や、市の教育センターで半教師、半心理職のような立ち位置での仕事をしてきた。

脳性まひの子やASDの子、ダウン症の子等、関わってきた。

【これらの経験は、とても貴重です。脳性まひの子への発声発語指導の経験は、吃音のブロックの解消方法を考える一助になります。ASDの傾向のあるお子さんへの構音指導は、指導者と子どもが一緒に同じ課題に向き合うための関係作りにおいて、“今、その子の心情に気づき、瞬時に適切な対応をする”ための指導者の感性を鍛えてくれます。ダウン症のお子さんにおいては、ダウン症の特性として、

舌が恒常的に丸まっている場合があります。このような時だけは、舌の緊張を軽減する訓練も勿論行いますが、機能的構音障害ではありませんから、目指す終了の構音状態は、『聞かれ易さ』、つまり、『どの程度の改善』をという視点から判断することになります。

このように、脳性まひの子への発声発語指導の考え方や訓練方法は、ほかの問題に適用できないか、また、ASDと診断されないまでも、関係が取りにくい子どもはいますし、自信のなさから、落ち着きがなくなり一見ASDがあるような振る舞いをしてしまう子どももいます。そんな子どもとの関係を構築するためにASDの知識を活用することはできないか等と、ある一つの方法や考え方を別の指導課題への適用を検討する、また、応用する（トランスファーtransfer）ことができれば、指導の方法や技術のレパートリーが広がり、その指導に深みが生じてくるものと考えています。】

緊張をとるというところでは、授業「自立活動」の枠で静的弛緩法をベースにしたことをしてきました。今一度、意識していきたいと思いますし、障がいのあるお子さんに対しての言葉の学習についても、ぜひ、先生に教えていただきたいと思った。【具体的には、どのような内容でしょうか？ できるだけご要望には沿いたと思います】

吃音はコントロールすること、変えることが可能で、気を付けることによって楽な話し方を身に付けられたと感じてもらえるような関わり、指導ができるよう学んでいきたい。

吃音とは何か、指導の肝になるようなことを教えていただいた。

O4B

今回2日間にわたって実りある勉強会を開いて頂きありがとうございました。臨床で分からずモヤモヤしていた事が解決できそうなので、今は早く訓練を行ってみたいという気持ちでいっぱいです。

私は、小児の領域に足をふみ入れてまだ半年も経っていませんので、経験値が絶対的に足りません。そのため、今回のように様々な症例の方々の映像や音声を見たり聞いたりする機会があった事が、大変ありがたかったです。自分が今取り組んでいる訓練も、やりようによってはいくらでも吃症状を悪化させたり、良くしたりする可能性があるかと改めて感じました。

共調発語指導という言葉も今回初めて聞きました。少し遅れて話す【H-DAFの適用】だけであんなに大きく変わったこと【吃音中核症状の減少】に驚いたのと同時に、こちら側もかなり練習をして技術を高める必要があるなと痛感しました。

以前も質問したのですが、吃の自覚を持っておらず「言いづらい」という感情が強くなっているお子さんへ関わる際に、改めて自分の声もよく分析し、よく聞いていく意識を持つとうと思いました。そして、その子が訓練場面で見せてくれた行動をネガティブに受け取るのではなく、プラスに受け取れる自分になりたいです。

先生に質問しなかったら、ずっと気が付けないままだと思います。本当にありがとうございました。

2日間にわたり教えて頂いたことをヒントにしながら、今受け持っている子供たちへ関わっていきたいと思います。

## 05B

教えていただいたゲーム、さっそくとり入れていきたいと思います。ゲーム中、指導者側もついテンションがあがってしまい、こどもにとっての楽な発語を忘れてしまうことがあります。こどもと一緒に楽しみながらも、目的を持ってとりくめるよう気をつけていきたいと思いました。

自分の声の質、出し方、くせなど、自分ではなかなか気づくことができないので、実技研修は、とても勉強になりました。

## 06A

“楽に発語できている状態”というのは、どういう状況のものなのか、繰り返し繰り返し茂君の吃音の音読動画を視聴させていただく中で、少しずつ分かるようになってきました。梅村先生の解説の後、再度2～3回動画を視聴させていただき、さらに“なるほど”と思えました。たっぷり時間をかけていただき、本当にありがとうございました。

“共調同時音読” “ゲーム”にも、技法の奥深さを感じました。「読み手によせてきて、一見、“共調同時音読”をしているつもりが、“合唱の形”になっている」とのご指摘を受けました。“沿うように合わせて読む”ことについてさらに勉強していきたいと思いました。“ゲーム”についても、カードやさいころにも工夫がほどこされていることや、指導者は吃音を誘発させないように【低年齢児の場合、吃音を誘発してしまった後、再度“楽な発語に戻す”ことが難しくなるので、特に気を使います】声のトーンに気をつけることなどのポイントもその都度その都度に教えていただき、大変勉強になりました。

2日目は、音読教材の使い方について、教えていただきました。音読プリントの右上にある3つの四角のマスの意味、音読教材の渡りの仕方、音読練習のポイント等、見えない部分（分からなかった部分）を見えるように（分かるように）していただきました。

私自身も声がうわずってしまうことも多いことが自覚できた研修でもありました。吃音のお子さんの楽な声を見つけて練習していきたいと思います。

## 07B

構音指導が難しいとの“のろい”は、「正しい音が出ればいい。」この一言が時間をかけて解説されました。「吃音の指導は難しい。」との呪いはまだ解説されませんが、「楽に声が出せばいい。」この一言が解説のおふだの様です。気を抜くと、ひと声のあいさつだけで、吃音を誘発させる自身の語調やイントネーション等の自覚はあるものの、声を低く、速度を落とすのが精一杯ゆえ「楽しくゲーム」と「イントネーションを下げて」etcを同時に瞬時に行うことは「難しかった。」というのが正直な感想です。しかし、瞬時に様々な事を考えつつ行うのが、本来の指導のあるべき姿と言われれば、うなずくしかなく。自らの課題が見える程、減る事なく増え続けるため、まだ山形通いは続くのだらうと思いました。

今回の成果(?)は「平行同時音読」と「共調同時音読」の指導。

VTRで今まで違いは感じるものの、共調同時音読の方が声と一緒に（重なる？）感覚がはっきりみえた事でした。「何となく違う」「出来てない」から脱せないもどかしさが、少し（？）解消して帰路につけそうです。

次元君の紙を持つ手（指）の力が入った姿、幼児期の臨床にたずさわる者として、同じ思いをさせたくないと思っていました。私が出会った子たちへの責任を感じつつ。

## 08A

「楽な発語」や吃音の基本的なとらえ方のお話を聞き、茂君の「ジャックと豆の木」の楽な発語状況は昨年度よりは理解できたように思います。5つに絞った狭い答えがあったのも、私のようによく聞き取れていない者にとってはよかったです。実際の指導場面では、その場で子どもの状態を見取っていかなくてはいけないので、**自分の耳をもっと育てていかなければならないと思いました。**「指導対象者の声」に「指導者の声」を合わせる実技研修では、子ども役なのに先生に合わせてしまったり、先生役なのに子どもに合わせず自分の読みになったりしてしまい、アドバイスをいただきながらでしたが、

「合っている」と感じられた時は、心地よさを感じました。2日目に、次元さんの指導では、「楽に発語」がさらによくわかりました。最後に日直のリハーサルも行ったので学校での本番、そして今後の生活は次元さんも自信をもっていけたのではないかと思います。

**その子の生き方にも指導がかかわっていることを強く感じました。**

## 09A

1日目、吃音の症例を示していただき、Aeさんのように吃音をおさえようと舌を工夫して話す子もいることを知りました。Afさんがブロックで言いたいことを言えずにじゃがいもをさけ話をかえたところ、1人で指導していれば、多分話題をかえたんじゃない？と推測でおわるところなので、「話をかえている。」と見とれ【？「判断し」ということ？】、症状として深刻な状態であるという見方でよいことがわかり、よかったです。（昔の自分なら見逃していたと思います。）

今回、いつも参加されている先生方とグループを組んでいただき、ゲームでの声かけやなぞり、学ばせていただくことができました。音読では、「先生に聞いていただける」と思っただけで、力が入ってしまう（緊張しすぎる自分）に気づくことができました。出だしをタイミングを合わせるだけでなく、どんな言い方をしあげると相手も声を出しやすくできるのか、奥が深いし、またレベルアップして来られるようにと思いました。

2日目、子どものいい声がたくさん聴け、フリートークでの介入についても学ばせていただきました。吃音の子たちが本来もっているいい声に注目し、引き出し、子どもにもその声がいい声だと共有していくことで、直すという感覚でなく変わっていく指導、私もできるように私自身変革していきたいと思えます。**【それには練習しかないのですネ】**

10A

お聴きした話の全てがとても新鮮なお話でした。

今年はじめて吃音のある1年生の児童の担当になったので、教室でどのような指導をしていったらよいかに迷っていたので、今回教えていただいた共同同時音読法を試してみたいと思います。でも、その子の楽な声の出し方の聴きわけ方がとても難しいなあと思いました。これから鍛えていきたいと思います。

講座の中で沢山のDVDを見せていただいたので、目と耳で感じることができたのがとてもよかったです。

また、**気になったことをすぐ止めてでも質問してくださいとっていただいたので、その時の疑問がその時にスッキリすることができ、もやっと感がなくお話をお聴きすることができました。**

今回吃音についての先生の考え方からスタートして、子どもの指導も初回から終了するときまでの流れを見せていただき、指導の流れがとてもよくわかりました。

とても大満足の2日間でした。夜までの時間が長くてとても不安があり参加しましたが、あっという間の時間でした。これからの指導に生かしたいと思います。

11A

共調同時音読指導の体験ができて、とてもよかったです。**音読が合ったときの心地よさを感じました。【実際の指導でも、楽に声が出ているときは、ホッとした表情を見せるお子さんもいます】**子どもの音読、会話にもうまく合わせられるように努力したいと思います。

語尾を下げながら静かに声を出すことは、今までも気をつけてはいたのですが、そのことの大事さは、よくわかりました。

**【念のためです。指導対象児（者）の発語の特徴に応じて、語尾を下げる必要があるときだけ下げるのであって、吃音のある人と話すとき、常に語尾を下げれば良いわけではありません。指導なので、文頭から下げた方がよい場合もありますし、語尾といっても何モーラ前から下がるように声を合わせるか、どのタイミングでどの程度下げるか、さらに、どの程度語尾のキーを下げてあげると“楽な発語”になるのかを適切に判断しながら実行してください。適切な理由があれば、キーをいつもよりも低くして話しかけたり、キーを高いまま話を終わすこともあっていいのです。この子とお話をするときは、このキーでというようにパターン化するのは止めましょう！**

ところで、このような話があります。

男のお子さんの吃音に悩み、手当たり次第に吃音の文献を探し、やっと『普段の生活で親としてお子さんとの会話上、気を付けること』を知ったそうです。それは、「子どもに話しかけるとき、少し低めの声で、ゆっくり話しかけてあげるのが良い」というものでした。そこで母親は早速実行に移しました。『ゆーっくりと、より低ーい声』で、話しかけたそうです。ですが、ついに、お子さんから、話しかけることを拒否されました。「ママ、止めて！ 怖いから止めて！！」だったそうです。

ゲームも体験でき、声の出し方を意識できました。フリートークのときも、さりげなく(?) 合わせていけば良いこともVTRを見て、わかりました。

楽に声を出す、出しているところに目を向け、**子どもと一緒に気づいていくことが大事**であることがイメージできました。【「子どもと一緒に気づいていくことが大事」って、何をどのようにして気づかせていくのでしょうか？ 気づかせて良いかどうかの判断は、ちゃんとしたの？ Aさんにして良いことは、Bさんにとっては、マイナスになるなどということはたくさんあります。今日のAさんに良いことが明日のAさんにはマイナスだなどということも普通にあります。要は、何をどのようにするかは、『お子さんの発語の様子、心的状況をつぶさに把握判断し、それに適した対応をする』ように心がけましょう】

指導のVTRをたくさん見せていただき、イメージをもたせていただけたことがとてもありがたく思います。吃音のことをたっぷり学べたこともよかったです。

12B

今回、初めて吃音指導講座に参加させて頂きました。私も在学時に吃音は治らないから、食べる事を気にしない様な**メンタル作りが大事**であると学んできました。【**吃音が直るか否かに関わらず、メンタル作りは大事だと思います**】私は現在ひとり立ちしていない状況でどの様な療育をしていけば良いかわからない状況にありました。この度、梅村先生の講義を聞き、吃音に対する考え方がとても変わりました。前回の構音の研修に続き、療育に対する考え方が、改めて変わりました。一早く、自分自身としては、まずは、子供と関わるまで、梅村先生からご教授頂きました手法を自分なりにまとめ、実施出来るようシミュレーション等を重ねていきたいです。来年、どうぞよろしくお願い致します。

13B

音読の実技研修では、梅村先生に『**いい声が出た時**』を教えていただけたのがありがたかったです。実際に映像を見ながら解説していただけるので、とても分かりやすかったです。また、ゲームも体験できたこと、構音指導にも活かせることが分かりました。臨床の実際を見ることができ、体験することができ、大変勉強になりました。

7月に構音の研修に参加させていただき、さっそく音の真似をやってみました。サ行音が出るようになったとともに、『**今日は楽しかった。また次もやろう。**』と言ってもらえることができました。研修会に参加させていただき、本当によかったです。

【一人の人の発語において、「吃音の出る口」と「構音を誤る口」は同じなはずですが、ですから、「吃音と構音の誤り」を主訴に訪れた相談者に対して、「発音の練習をさせると、吃音が悪化するの

で、すぐに発音の練習することはしません。」と説明し、約5年もの長きに渡って『構音を改善する指導』を全く行わないなどということは、あってはならないのです。

「**今日は楽しかった。また次もやろう**」と子どもから言ってもらえる構音指導は、お子さんの“有能感”や“自信”を育みます。つまり、“**メンタル面**”への指導です。また、構音指導の方法は、即模倣です。つまり、構音指導を通して“**流暢性**”にかかると指導をもできるわけです。

大切なことですから、再度繰り返し述べます。『“吃音と構音の誤り”を主訴に訪れた場合、「子どもを育てる構音指導」ができれば、吃音にとっても良い結果をもたらす』のです。そして、このような

指導ができるようになろうと努力することが、相談者の不安や悲しみや悩みに“寄り添う”ことなのではないでしょうか】

14A

アプローチの仕方をその子のその瞬間に合わせて変えていくということ、そのための指導者側の感じ取る力、気づく力、対応する力が不可欠ということが、梅村先生のお話や演習を通してよくわかりました。

ペアを変えて音読の声合わせをした時に、相手によって声のトーンの高い低い、イントネーションが違う、声の大きさや響き、読む速さの違い、呼吸するタイミングなど合わせ方が全く違って、いい練習になりました。【相手の声の質への配慮を欠くことは、ややもすると無理な発語を要求することになります。“一緒に読んだときは吃らないで読めたのに、一人読みになったらまた吃り出す”という現象は、恐らく、相手の声の質への配慮を欠いたために生じるものと考えています。

小学3年生の女の子の相談がありました。母親からの電話での相談申込みです。本人は吃音を直したいと強く感じていること、直るものなら、毎日でも通いたいと言っていることが母親から伝えられました。それなのに、不安そうに「本読みの練習はするんですか」と聞くのです。「どうしました？」と梅村。「実は、本読みの練習があるなら行きたくない。本読みの練習が、有るか無いか聞いてと娘が言うんです」とのこと。1年生から通っていたことばの教室では、1年生の頃は、オセロとかお絵描きとかで楽しく通っていたけれど、担当の先生が代わってから、音読ばかりで、その音読も、先生と読むと吃らないけど一人読みになると吃り出すというのが、ここ1年半以上続いていて、本読みの練習をしてもことばは直らない、だから本読みの練習をするなら行っても無駄だと本人が言うんです。それで本人の意思で“ことば”は、辞めましたとのことでした。

これまで受けた指導は、“音読への自信が、生活への自信に通じる”音読指導になっていないどころか、ことばへの挫折を味わわせていた指導だったと言うのは言い過ぎでしょうか】

今回は時間がたっぷりあって、梅村先生や田代先生に何度も見ていただけたおかげか、声を合わせる感覚が少しつかめた気がします。指導者役、子ども役と交代しながら声を出しているうちに、最初出しづらかった声が、後半楽になって、どんどん声が出るという、不思議な感覚を味わいました。これが楽に出せるということなのでしょうか。

ゲームをする時も、楽しみながら、どんな子に対して何をねらっていくかを判断しながら進めていくことは言われてみれば当然なのですが、ぬけ落ちていたり、どう提示すれば良いかすぐ浮かばなかったりと、まだまだ先は長いなぁと感じました。

15A

吃音の指導に迷いがあり、本を参考にしたり、講習会や研修会に出たりしていました。ただ、実践的なものがわからず、ずっと迷ったままでした。

今回、参加させていただいて、実際に子どもの指導をしている様子を見せていただいたり、音読指導の仕方を教えていただいたりすることができて、今後の指導に生かしていけそうです。